

## 南部メコン・デルタにおけるベトナム戦争

—ヴィンロン地方における解放勢力側の戦士8人への聞き取り調査—

今井 昭夫

本研究ノートは、2006年11月21日から同月25日までベトナム南部のヴィンロン(Vinh Long)省およびチャーヴィン(Trà Vinh)省において、ベトナム戦争当時に解放勢力側として戦った8人の方々に聞き取り調査をした結果をまとめたものである。

この聞き取り調査のそもそもの目的は、ベトナム戦争期の旧南ベトナムの農村において、かつての解放勢力側についての人々とサイゴン政府側についての人々がベトナム戦争後にどのように「戦後和解」に到っているのか、あるいは到っていないのかを調査することにあつた。ベトナム戦争当時の旧南ベトナム農村においては、サイゴン政府支配地区、競合地区、解放区に色分けされ、競合地区においては、サイゴン政府と解放勢力とが支配権をめぐる争った。たとえばグエン・チー・ファン作の小説『ツバメ飛ぶ』<sup>1</sup>(1990年度ベトナム作家協会賞受賞)は、競合地区の村では、双方が凄惨な戦いを展開し、対立がいかに根深く刻み込まれたのか、そして「戦後」の和解がいかに大きな課題となっていたのかを如実に示している。ベトナム戦争は解放勢力側の勝利に終わったが、「戦後」ベトナム社会にこのような対立・憎悪の傷跡はどのように解消されたのか、あるいは解消されずに存続してきているのだろうか。この問題について従来のベトナム現代史研究では本格的に解明されてこなかった。「南北統一」を讃える声や公式的な「戦争の記憶」の陰で、ベネディクト・アンダーソンが指摘するように、「兄弟殺し」が「忘却」されてきたわけである<sup>2</sup>。

筆者は、ベトナム戦争当時に競合地区であつたとされる南部メコン・デルタの農村で聞き取り調査を行ない、上記の問題に少しでも肉薄しようと試みた。しかしこの試みは十分な成果をえることはできなかった。その最大の障害は、勝者の解放勢力側の人々にはインタビューできたものの、敗者のサイゴン政府側についての人やサイゴン軍兵士だった人にはインタビューすることができず、証言が一方的なものとなつてしまつたからである。そこで本稿では、解放勢力側の人々の聞き取り調査をもとに、ベトナム戦争当時の南部メコン・デルタにおけるサイゴン政府側と解放勢力側の関係、「南」と「北」の接触・交流の様相を描き出すことを目的とする。

「北」の浸透、とりわけ正規軍の派遣の時期、解放勢力の軍事的指揮権、実質的主導権はどこにあつたのか、「北」と「南」双方の受け止め方はどうであつたのかといった点などについてヴ

<sup>1</sup> グエン・チー・ファン著、加藤栄訳『ツバメ飛ぶ』てらいんく、2002年。

<sup>2</sup> ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体』NTT出版、1997年、326ページ。

インロン地方での聞き取り調査の内容を整理する。

## I. 聞き取り調査の概要とベトナムにおける軍隊用語

### 1. 聞き取り調査の概要

聞き取り調査は2006年11月21日から同月25日までベトナム南部のヴィンロン省およびチャーヴィン省において、ベトナム戦争当時に解放勢力側として戦った8人の方々を対象に行なった。調査地は、解放勢力側とサイゴン政府側の競合地区であった農村であること、研究協力者で調査同行者のA氏（ベトナム国家人文社会科学センター・社会学研究所研究員）が、かつてベトナム戦争中に北ベトナム正規部隊の一兵士として駐屯し土地勘のある所ということで選定した。

2004年の統計によれば、ヴィンロン省は人口が約105万人で、省都ヴィンロン市は12万人、今回の調査の主な宿泊地であったタムビン（Tam Binh）県は約16万人である<sup>3</sup>。ヴィンロン省はメコン・デルタのほぼ中央に位置し、低湿地の水田が広がり、兩岸にニッパヤシが茂る水路が縦横にめぐらされているところである。南部の中心都市ホーチミン市からヴィンロン市まではおよそ150キロメートル、乗り合いバスで約3時間。ヴィンロン市からタムビン市へは約50キロメートルで、自動車でも1時間である。今回の調査では、8人（全員男性）にインタビューできた。元ゲリラ5人と第9軍区の元士官2人、そして当地に駐屯経験をもつ元北ベトナム正規軍兵士1人（A氏）である。元ゲリラ5人のうち、タムビン市郊外のタムビン県ミーロック（Mỹ Lộc）社<sup>4</sup>と同県ハウロック（Hậu Lộc）社で、それぞれ2人の元ゲリラの方にインタビューした（ミーロック社は11月21日、ハウロック社は11月22日）。ミーロック社在住でインタビューに応じてくれたティンによれば、タムビン県とミーロック社はそれぞれ「英雄県」、「英雄社」に顕彰されており、解放勢力が強かったところである。インタビューは2つの社の人民委員会に元ゲリラの方を紹介していただき、ゲリラの方の自宅に伺って実施した。インタビューしたもう一人のゲリラの方はチャーヴィン省カウケー（Cầu Kè）県アンフータン（An Phú Tân）社在住者で、研究協力者・同行者のA氏がベトナム戦争中当地に駐屯していた頃、お世話になっていた家族の一員である（調査日は11月23日）。チャーヴィン省はヴィンロン省のほぼ南に隣接している。タムビン市からアンフータン社まで行くのにオートバイで約2時間を

<sup>3</sup> *Việt Nam Administrative Atlas*, Nhà Xuất Bản Bản Đồ, 2005, p.71.

<sup>4</sup> ミーロック社人民委員会の説明によれば、ミーロック社は人口が9073人で、農民が主である。共産党員は約430人。インタビューのドゥック（ミーロック社退役軍人会主席）によれば、ミーロック社の退役軍人会は会員数165人、そのうち32人が共産党員。ミーロック社には有名なCái Ngangの革命基地があり、現在、革命遺跡として残されている。

要した。

第9軍区の元士官2人は、ヴィンロン省「退役軍人会」の現職の主席と副主席で、ヴィンロン市内の「退役軍人会」事務所においてインタビューした(11月24日・25日)。ベトナム戦争中に当地での駐屯経験をもつ元北ベトナム正規軍兵士であるA氏へのインタビューはヴィンロン市内のホテルで11月24日に実施した。いずれのインタビューも自由質問形式でベトナム語によって行なった<sup>5</sup>。

## 2. ベトナムにおける軍隊用語

以下では、ベトナムにおける軍隊用語を若干説明しておきたい<sup>6</sup>。

ベトナムでは軍隊は、主力部隊、地方部隊、自衛・民兵の3種類に分けられている。「主力部隊 (bộ đội chủ lực)」は軍隊の中心となる正規軍である。

「地方部隊 (bộ đội địa phương)」は上記3種の軍隊のうちの一つであり、省クラスと県クラスの地方行政区分である省 (tỉnh)、郡 (quận)、県 (huyện)、市社 (thị xã) において組織される。1949年4月7日に成立。省クラスは省隊 (tỉnh đội)、県クラスは県隊 (huyện đội) と呼ばれる。

「ゲリラ (du kích)」は民兵の中核勢力で、1940年頃から形成された。八月革命を準備する段階で急速に発展し、八月総蜂起(1945年)を全国的に進める推進力の一つとなった。1949年に一部は地方部隊となった。ベトナム戦争中、南部の農村で大きく発展し、他の勢力と協同して戦闘し、人民戦争を担った。1947年に「自衛」とゲリラが「自衛民軍 (dân quân tự vệ)」と統一されて呼ばれるようになった。「自衛民軍」は大衆武装勢力で、地方の党委と政権によって直接指揮される。「自衛民軍法令」(2004年)によれば、「自衛民軍」は社クラスの地方行政区分である社 (xã)、坊 (phường)、市鎮 (thị trấn) において組織される。本稿でいうところのゲリラは、この「自衛民軍」に相当する。

次に軍隊の編成についてであるが、アメリカの南ベトナム援助軍司令部編の『ベトコン専門用語集』では、ベトナム人民軍隊の編成を「中隊 (trung đội)」は platoon、「大隊 (đại đội)」は company、「小団 (tiểu đoàn)」は battalion、「中団 (trung đoàn)」は regiment、「旅団 (lữ đoàn)」は brigade、「師団 (sư đoàn)」は division としている<sup>7</sup>。本稿では日本語としてこなれていないが、「小団」や「中団」などベトナム語の呼称をそのまま使用する。1972年から北ベトナム正規軍

<sup>5</sup> 本聞き取り調査は、21世紀COE「資史料ハブ地域文化研究」オーラルアーカイブ班の事業の一環として行われ、その録音テープとテープ起こした原稿はオーラルアーカイブとして保管されることになっている。

<sup>6</sup> ここでの記述は、Bộ Quốc Phòng, *Từ Điển Bách Khoa Quân Sự Việt Nam*, Nhà Xuất Bản Quân Đội Nhân Dân, Hà Nội, 2004. および小高泰『ベトナム人民軍隊 知られざる素顔と奇跡』暁印書館、2006年、を参照している。

<sup>7</sup> U.S. Military Assistance Command VIET NAM, *Viet Cong Terminology Glossary*, San Francisco, 1968. p.260.

兵士であった A 氏の所属していた歩兵部隊では、最小の単位が班 (tổ) で 3 人、小隊は 3 班 (9 人)、中隊は 4 小隊 (36 人)、大隊は 4 中隊 (144 人)、中団は 12 大隊 (1728 人) であった<sup>8</sup>。

2004 年以降、ベトナムは 8 つの軍区に分けられている。メコン・デルタ西南部の地域であるカマウ (Cà Mau)、ラックザー (Rạch Giá)、ソックチャン (Sóc Trăng)、ヴィンロン、カントー (Cần Thơ)、チャーヴィン、ハティエン (Hà Tiên) は第 9 軍区に区分されている。今回の調査地は第 9 軍区に所属している。第 9 軍区は、下で述べる「ベトナム南部解放軍」と同じ 1961 年に成立し、その後、第 8 軍区の一部を吸収して管轄地域が拡大されている。

ベトナム戦争中の南部での解放勢力側の武装勢力の全体的呼び方については慎重な扱いを要する。「南ベトナム民族解放戦線軍」<sup>9</sup>や「解放戦線の部隊」<sup>10</sup>というような言い方がされることがあるが、後述するように、南ベトナム解放民族戦線が軍事的にどれだけ主導権があったのかは検証の余地があり、このような呼び方は再考すべきであろう。ベトナムでは、「ベトナム南部解放軍 (Quân giải phóng miền Nam Việt Nam)」が使われている<sup>11</sup>。これについてベトナム国防省編『ベトナム軍事百科事典』では以下のように説明している。「南部の戦場で戦闘しているベトナム人民軍隊で、1961 年 2 月よりベトナム労働党政治局の方針と総军委 (中央軍事委員会) の指示に基づき、南部での革命任務のために全国で組織され、ベトナム南部解放軍の名称をもつ。ベトナム南部解放軍は、1956 年末から再組織化された南部の武装自衛隊、武装宣伝隊の基礎の上に建設・発展し、1959 年末から北部の要員が補充・増強されている。労働党の指導の下、国防省・ベトナム人民軍総司令部の指揮の下に置かれた。直接的には、南部中央局とその直属の軍事委員会に (1963 年 10 月からは南部軍事委員会と南部司令部)。主力部隊の勢力は、集中的戦闘能力が 1961 年では大隊レベルで、1963 年末から 1965 年で小団、中団レベル、1965 年末で師団レベル、1972 年から複数の師団、軍団、複数の軍団レベルへと発展していった」<sup>12</sup>。以上の説明の中では、ベトナム人民軍隊であること、労働党の指導下に置かれていることが明確にされている。南ベトナム解放民族戦線の名前は全然出てきておらず、その関与のありかたも不明である。また、59 年末から北部の要員が補充・増強されているとされているが、北の正規軍の本格的投入の時期についてはここでは言及されていない。

<sup>8</sup> ほぼ一般的には次のように相当すると考えられる (カッコ内がベトナム側の単位)。「小隊」が分隊、「中隊」が小隊、「大隊」が中隊、「小団」が大隊、「中団」が連隊。本稿では紛らわしいのでベトナムでの呼称をそのまま使用する。

<sup>9</sup> たとえば三野正洋『わかりやすいベトナム戦争』光人社、1999 年、142 ページ。

<sup>10</sup> たとえばガブリエル・コルコ著、陸井三郎監訳『ベトナム戦争全史』社会思想社、2001 年、202 ページ。

<sup>11</sup> 小倉貞男氏は「人民解放武装勢力」(PLAF) という訳語をあてている。小倉貞男『ヴェトナム戦争全史』岩波書店、1992 年、124 ページ。

<sup>12</sup> Bộ Quốc Phòng, *op.cit.*, p.838.

## II. メコン・デルタのゲリラ戦士への聞き取り

### 1. 5人の元ゲリラの略歴

ここではインタビューした5人の元ゲリラ戦士の聞き取り調査の概要をみていく。名前はファーストネームのみを記している。

	名前	年齢(数え)	参加時期	参加時の学歴	主な活動
1	ティン	60歳	1961年から	5年生	ゲリラ、県の公安、部隊
2	ドック	58歳	1963年から	4年生	ゲリラ、看護兵、カンボジア参戦
3	ティー	82歳	1939年から	5年生	ゲリラ、県の党支部
4	ゲー	57歳	1967年から	就学せず	ゲリラ、農民
5	ティエン	55歳	1968年から	就学せず	ゲリラ、農民

上の1番と2番はヴィンロン省タムビン県ミーロック社在住、3番と4番は同省同県ハウロック社在住、5番はチャーヴィン省カウケー県アンフータン社在住である。まず、聞き取り調査した内容をもとに、上の5人の経歴を簡略に紹介しておく。

(1) ティン(ゲリラ:61~63年、県公安:63~69年、第3中団:69~75年)

父親もゲリラ。ティンは16歳で参加し、1961~1963年の3年間、ミーロック社でゲリラ活動に従事した。その時、相手として最も多く戦ったのが「保安」隊であった。1963年からタムビン県の公安(解放勢力側)でスパイの取り締まりなどにあたった(1969年まで)。1969年6月に第3中団の3123小団に入隊した(1975年まで)。南部解放時はヴィンロン市にいた。戦後、家庭の事情で帰郷。現在、「退役軍人会」会員で、恩給は受給していないが、負傷兵手当てを月に30万ドン受給している。

ティンによれば、ミーロック社は「競合地区」で、住んでいるところから敵の兵営まで500メートル足らずであったという。公安時代、地方の武装隊を手伝って夜間に「徴税」にいくことがあった。スパイは公安が取り扱い、捕虜は県隊が管理した。1967年頃に南部の都市ではホンダ(オートバイ)が登場するようになった。軍隊時代、ティンは第3中団に属していたが、同時期に同じ軍区内で戦闘していた第1中団との違いをティンは力説。彼によれば、その頃の第1中団はすべて北部の兵士からなる正規部隊であった<sup>13</sup>。ヴィンロンとチャーヴィンでは最

<sup>13</sup> 第9軍区第330師団所属の第1中団は1963年9月に成立。ベトナム戦争中は、カマウ、カントー、ラックザー、ソックチャン、チャーヴィン、ヴィンロンで活動。BỘ QUỐC PHÒNG, *op.cit.*, p.1124.

初は第3中団だけであったが、後に第1中団が加わるようになった。第1中団は午後5時の攻撃が得意であったが、デルタでの戦場経験が浅く、地形等の違いに不慣れなため苦戦し、払った犠牲も大きかった。1972年から北の正規軍が登場するようになったが、それ以前はゲリラと地方部隊が主であった。南部の人民は北の部隊を好んでいた。そうでなければ、北の部隊は何もできなかった。また北の後ろ盾がなければ、南部を解放することはできなかった。

(2) ドウック (ゲリラ：63～67年、県隊：67～75年、カンボジア駐留：82～89年)

4年生だった1963年からゲリラに参加。1967年には部隊(県隊)に入隊したが、その時はまだ字がよく書けなかった。ヴィンロンの省隊はテト攻勢でかなり消耗していた。県隊の看護兵を1969年末・1970年初まで務めた。医療器具は町で購入してきたアメリカ製で、中国やソ連製のものはなかった。武器も敵から奪ったものが主であった。最も戦闘が激しかったのは1969年で、米軍も掃討にやって来た。1970年にカマウの第9軍区軍政学校で18ヶ月間学んだ(12ヶ月は軍事技術一般、6ヶ月は偵察技術)。カマウまで歩いて1ヶ月かかった。それを終わると、タムビン県地方部隊(県隊)の副大隊長になった。サイゴン軍との戦闘で負傷。1975年までタムビン県で活動。給料もなく、衣服も支給されず、人民によって養われ、食事もつくってもらった。戦後、カントーの政治中級学校で学び、さらにホーチミン市でカンボジア語を18ヶ月学んだ。1982～89年、カンボジアに駐留し、タイ国境地方で偵察任務につく。30年間のゲリラ・軍隊生活を終えて、1993年に退役。現在、ミーロック社の退役軍人会主席。

(3) ティー (ゲリラ・社隊：39～75年、県党委：79～87年)

1924年生まれ。1939年から革命運動に参加し、1940年11月23日のナムキー蜂起にも参加。最初はゲリラで、宣伝活動に従事。八月革命(1945年)後、武装解除で武器をフランス軍に引渡したが、地方では引き続き戦争の準備もしていた。1946年からハウロック社の救国青年団執行委員会、47年に宣伝委員会に入った。48年・49年には社の宣伝通信委員長。1950年には社隊の政治委員になった。ジュネーブ協定後も、北部に「集結」しないで当地に残った。ジュネーブ協定後、民主的権利の行使と捕虜の交換の2つに留意し、闘争を続けた。中央の主張は「長期に潜伏して時期を待つ」であり、しばらくは宣伝工作を控えたが、夜には宣伝工作を行っていた。ジュネーブ協定後にラジオを購入し、ニュースを聴くようになった。1959年の「稠密区(khu trù mật)」(アグロヴィル)は地方に多大の困難を与えた。ゲリラはロンヒエップ(Long Hiệp)から援助を受け、人民に庇護されていた。地区の経財委員長として邑(ấp)(社の下位区分)の住民や邑長とよい関係をもち、邑の人々は税を納めてくれた。1959年の時、ゴー・ディン・ジェム政権の国家治安維持法「第10号法令」で弾圧が強まり、解放勢力は地下に潜ることを余儀なくされ、自分も地元を離れた(翌年に戻る)。ベンチュー蜂起の時、ヴィンロンでも1960年9月14日に蜂起が発生した。1962年の「戦略村」の時期は暗黒時代であったが、「稠

密区」の教訓をえており何とか対応できた。テト攻勢後の 1969・70 年の「平定」期、当地は「平定」重点地区となり、弾圧を受けゲリラ勢力も各邑に数人ずつとなった。パリ協定後、次第に勢力が回復し、1974 年には拡大し、312 小団も駐屯した。戦後、県に出て、1979 年から 87 年まで県党委の組織委員長を務めた。1987 年に退職。

#### (4) ゲー (ゲリラ：67～75 年)

1950 年生まれ。10 人兄弟の末っ子で、兄弟の多くもゲリラ。学校には行っておらず、字が書けない。1967 年、父が砲撃で死亡。同年、ゲリラ活動に参加。敵に捕まり、ヴィンロン市に 20 日余り拘置されたが、母親が賄賂を払い、釈放される。米軍は毎日 3・4 度空爆してきた。社のゲリラもテト攻勢の準備をした。テト攻勢の時、解放勢力はヴィンロン市に結集し、地方は手薄になった。米軍はゲリラに投降を呼びかけるビラを撒いた。戦闘では当初、ゲリラ側に多くの犠牲者が出たが、後に多くの米軍戦闘機を撃墜した。敵は民家をよく搜索にきたので、ゲリラは民家に罾を仕掛けたりした。1970 年、テト攻勢後の鎮圧が激しくなり、第 9 邑では社のゲリラが 6 人だけになってしまった。1970・71 年は希望がない時期だった。戦争中、危険な兵器や化学兵器 (殺虫剤など) も敵を討つために使用されたが、多くの味方の犠牲者も出た。1975 年にはハウロック社のゲリラを結集してタムビン解放のための部隊を編成した。南部解放時はこの社にいた。戦後は農民。以前、社の退役軍人会主席をしていたことがある。

#### (5) ティエン (ゲリラ：68～75 年)

1952 年生まれ。米軍がムラを破壊し親族を殺した恨みでテト攻勢の 1968 年からゲリラに参加。学校には行っていない。同年齢の男子は多くがゲリラになった。兵器は不足していた。ゲリラはムラの人々によって生活が支えられていた。北部の部隊は当地に 1963 年から入っていたが幹部だけで、1965 年にもいたが、大量に歩兵部隊が来たのは 1972 年から。ゲリラは正規軍の道案内などをした。パリ協定前も、主にサイゴン軍と戦った。当地の社のゲリラは 100 人以上いた。女性もゲリラに参加した。女性は主に炊事、怪我人や弾丸の搬送に従事し、銃をもったのは男の 3 分の 1 ほどだった。辛かったのは、戦死者が出たこと、潜水すること、夜間の爆撃であった。飢えることは少なかった。爆撃が終わることが楽しみだった。最も印象に残っているのは、米兵と直接戦闘したことで、その時米兵一人を射殺した。戦後は農民。1987 年から退役軍人会に入っている。

## 2. 元ゲリラのインタビューから読み取れること

①概してゲリラは学歴が低い。上の 5 人は 10 代でゲリラ活動に参加し、学歴が 5 年生以下で、そのうち 2 人は学校に行っておらず、字もよく書けない。ドゥックとティーはその後研鑽を積み、県の幹部や正規軍で活躍するようになったが、学校に行っていないゲーとティエンは

戦後も農民のままであり、字もまともに書けない。公安だったティンは、「私は学歴が低かったが、スパイのやつらは高かった」と述べている。ベトナムの「退役軍人」は巷では冗談半分に4つの特徴があるといわれている。それは、1. 年をとっている (già)、2. 貧しい (nghèo)、3. 学がない (dốt)、4. だんだん亡くなっていく (chết dần)、である。南部の「退役軍人」、とりわけ元ゲリラの特徴は、北部の一般兵士と比べても学歴の低い人が多かったことである。A氏によれば、ベトナム南部解放軍には文字を書けなかった人も沢山いた。A氏は部隊の上司に字を教えた経験がある。字が書けなくて書類に署名ができないので○を書いて済ますケースもあり、「名前丸 (tên tròn)」と呼ばれたという。南部ゲリラは貧しく学のない農民たちであった。

②ゲリラになった動機は家族・親族つながりが強い。家族がゲリラなど解放勢力の戦士であり、それに従ってゲリラになったケースとして、ティン、ドゥック、ゲーの場合が挙げられる。ティンとゲーは父親がゲリラで、ドゥックは兄が軍人であった。さらにゲーは、父が殺された恨みを抱き、自分が捕らえられて虐待され死ぬよりは戦い、敵の手先にはならない決意をしたという。ティエンは、米軍がムラを破壊し親族を殺した恨みでテト攻勢の1968年からゲリラに参加した。ドゥックによれば、サイゴン軍に徴兵されるのが嫌で解放勢力側に来た人もいた。これらの人の中には、解放闘争に熱心でなく、サイゴン政府側に再び戻った人もいるという。

③「競合地区」は双方が戦いながら相互依存。ヴィンロン省のミーロック社とハウロック社は、解放勢力が強かったものの、「競合地区」であったといえる。ドゥックは、この地方には完全な解放区、完全なサイゴン政府支配地区はなかったと指摘している。昼間はサイゴン政府に従い、夜間はゲリラを支持し、外面ではサイゴン政府、内面では解放勢力側を支持し、家族の中でどちらを支持するかで分かれることも多かった。根っからの反革命派は少ないが、ミーロック社には数十人のサイゴン軍兵士がいたという。同じ社に住むティンは、ミーロック社ミータン (Mỹ Tân) 邑はサイゴン政府側についた人は少ないという。ミーロック社では住民は解放勢力側が多かったが、サイゴン軍とも近く、夜間、ゲリラはタムビンの町に出かけることもできた。ハウロック社のティーが地区の経財委員長<sup>14</sup>であった時の話では、サイゴン政府側の給料を受け取っていた邑長も「ベトコン」を助けていたという。邑長は妻を通して解放勢力側にも税を納めていた。なぜなら妻子や自分が殺されたりするからである。しかしゲリラ側が何でもできたわけではない。双方が戦いながら、一定程度、協力し相互依存していた。人々は戦争に適応し、自分に利益をもたらすために、戦争を利用した。チャーヴィン省カウケー県アンフ

<sup>14</sup> ティーは経財委員長として徴税にあっていた。1月が徴税時期だったという。ただしA氏によれば、経財委員会は部隊・ゲリラのために食糧と薬品を調達し、負傷兵を助けるのが主な任務で、行政的管理はあまりしていなかった。人々は公的書類としてはサイゴン政府の書類を主に使用していた。



ータン社のティエンは、同年代でサイゴン軍兵士になったのは 10% ぐらいで、99.9% の家が解放勢力側についていたという。

④ゲリラは無給。ドゥックは、戦争中ゲリラには給料がなく、人々に養われて生活していたという。ティエンも、正規軍兵士は月々生活費を支給されていたのに、ゲリラは無給だったと指摘。ゲリラに加わった人たちは、戦後、恩給を殆ど受給していない。

⑤1960 年代初頭からゲリラ活動が活発化。インタビューの 5 人のうち 4 人が 1960 年代から活動を開始したので、それ以前のことについて語ってくれたのはティーのみである。彼によれば、当地ではジュネーブ協定後も闘争は秘かに続けられ、サイゴン政府による 1958 年の「稠密区」、1959 年の第 10 号法令は解放勢力に大きな打撃を与え、1960 年には蜂起がヴィンロンでも発生したという。ティンがゲリラに参加したのはその翌年からである。1968 年のテト攻勢後の鎮圧によって、当地のゲリラ活動が一時低調になったことは、ティーとゲーが証言している。ドゥックは 1969 年が最も戦闘が激しかったと述べている。ティンは、当地では 1972 年から北の正規軍が登場するようになったが、それ以前はゲリラと地方部隊が主であったと指摘している。

⑥北の正規軍は後ろ盾として歓迎。南部ゲリラの自負心。チャーヴィン省のティエンは、「北部の部隊は当地に 1963 年から入っていたが幹部だけで、1965 年にもいたが、大量に歩兵部隊が来たのは 1972 年から」と述べている。これは上のティンの証言と符合する。では北部の正規軍と南部のゲリラとの関係はどのようなものであったのだろうか。ティエンはおおよそ次のように語った。「当地はそれまで正規軍は多くなく、ゲリラの割合が多かった。ゲリラ勢力が手薄だったので、北部の正規軍が来てくれて、これで解放されると思った。北部の正規軍と地元のゲリラは協力して戦闘し、指揮系統は一つであった。北の正規軍に対しては敬愛の念をもっている」。ティンも、北の後ろ盾がなかったら、南を解放することはできなかった、南の民は北の部隊を好んでいた、と述べる。二人とも、北部からの正規軍と地元の地方軍・ゲリラとの関係は良好であったと述べている。その一方で南部ゲリラの自負心も窺える。ティンはこう述べる。地方によって戦い方は異なってくる。北からの部隊はデルタでの戦闘経験があまりないので苦戦し犠牲者が多かった。デルタにはデルタの戦い方がある。南の人の助けがなければ、このデルタでは北の部隊は何もできなかった、と。ティエンもゲリラが道案内等をしたので北の部隊は戦えたとする。ティーは、ゲリラ戦争はとても才智あふれたものだったと自画自賛した。さらにティーは、南ベトナム解放民族戦線はここでの抗戦に影響を与えていない、と明言している。

⑦旧サイゴン軍兵士に対して寛容。ドゥックは、サイゴン軍兵士の中にはやむなく兵士になったものもいると指摘し、「戦争のベトナム化」の時期でもまともに戦っていたサイゴン軍兵士

は一部だけで、残りは戦っているふりをしていただけだったとする。だから戦後、サイゴン軍士官には長期の改造学習を課したが、残りの一般兵士は地元で1週間学習させただけで済ませたという。ティエンも、サイゴン軍兵士になった人はやむをえなかった人が多く、解放勢力側に強く反対していたわけではない、サイゴン軍兵士も同じベトナム人であり、当時の環境でやむをえなかった、彼らに恨みはないとする。ただ、反革命者を愛さないし、反革命の戦死者は祀らない。またアメリカとは友好協力関係を築くことには賛成であるが、アメリカは枯葉剤の償いをしなければならない、と述べている。

⑧ベトナム戦争の勝因はベトナム人民の団結と共産党の指導。ティンは、その頃、国家はなく、党と人民があるだけで、共産党は巧みに指導し、祖国戦線の枠組みを使って人民を結集・団結させるのに成功したと指摘。ドゥックは、「物がなく精神による抗戦だった」と述懐。ゲーは、子どもまで敵を討つ意志が人々に強く、また戦争になっても人々は同じ様に戦うだろうと述べた。

### Ⅲ. 第9軍区の元士官への聞き取り

#### 1. 2人の元士官の略歴

ここでは、第9軍区の元士官であったフィン・チョン・ファム（Huỳnh Trọng Phẩm）とファン・タイン・ホア（Phan Thanh Hòa）の2人の聞き取り調査の内容をまとめる。いずれも地元メコン・デルタ出身で解放勢力側の家庭に生まれ、軍人となり、地元の第9軍区の重要な地位にまで昇りつめた軍人である。ただし、ホアは実際の軍歴はベトナム戦争後が主である。

	名前	生年	出身地	学歴	主要ポスト	階級
1	ファム	1942年	ソックチャン	高校	330師団師団長・党委書記	大佐
2	ホア	1951年	チャーヴィン	高校	第9軍区参謀部副政治主任	大佐

#### (1) フィン・チョン・ファムの経歴

1942年、ソックチャン省（ヴィンロン省の南に隣接する）で生まれる。1954年、救国青年団に参加。ジュネーブ協定後、兄弟と共に北部に「集結」する予定だったが、年少のため彼は残ることになった。高校を卒業するとサイゴン軍に徴兵されるので、高校卒業直前に地方工作に参加。第9軍区が成立した翌年の1962年、ソックチャン省ミーヌエン（Mỹ Xuyên）県で中隊の副隊長。同時に同県の青年団副書記を務める。1962年から軍区軍政学校で大隊幹部教育を18ヶ月受ける。1963年末から1964年初まで同校で戦術教員。1964年に306小団（1961年6

月成立) がチャーヴィン、ヴィンロン、サデック (Sa Đéc) で活動を始めるようになり、そこに勤務。その後、306 小団・57 大隊の大隊長に。さらに 306 小団・59 大隊の政治員。1968 年のテト攻勢で 306 小団のみがチャーヴィン、ヴィンロン、サデックの地方部隊と結合した第 9 軍区の主力部隊であった。306 小団はテト攻勢でヴィンロン市を攻撃。全国でフエとヴィンロンだけがテト攻勢で長期間占拠し、フエは 30 日間、その次がヴィンロンで 16 日間 (10 日は完全に。6 日は周辺を) 占拠した。1968 年 3 月、第 3 中団が成立。ファムは副政治員となる。1969 年、309 小団の副団長。翌 70 年に小団長。また第 3 中団の政治員に。1972 年、第 3 中団の党委書記。1975 年、第 3 中団の中団長、党委書記に。1976 年、クメール・ルージュが国境を侵犯すると、第 1 中団と第 3 中団が応戦。これを機会に、3 つの中団 (第 1 中団と第 3 中団および第 8 軍区所属のティエンザン Tiền Giang の部隊である第 2 中団) から第 330 師団が成立。第 330 師団はカンボジアに駐屯。ファム・ヴァン・チャー (Phạm Văn Trà) 大将が師団の参謀長でファムは副参謀長。その後、チャーが師団長になり、ファムが参謀長に。チャーの後、ファムが師団長になり、1984 年にカンボジアから撤退するまで務める。撤退を終えると、郷里に戻り、ヴィンロン省の党支部・内政委員や国家管理学校校長などを務め、1992 年に退職。

## (2) ファン・タイン・ホアの略歴

1951 年、チャーヴィン生まれ。父は軍人で 308 小団政治員、タムビン県隊長、チャーヴィン省隊副参謀長を歴任。1954 年に北部に「集結」。63 年に南部に戻り、ヴィンロン省隊長、第 9 軍区副参謀長などを歴任し、1966 年に戦死した。ホアは、1963・64 年、ヴィンロンとチャーヴィンで 4・5 年生までを修了する。1965 年、革命に参加。1966 年、カマウやラックザーで革命幹部の子弟を対象とした学校 (「少生軍」) で学ぶ。1968 年、テト攻勢をひかえ、306 小団に入隊。偵察大隊 57 に配属。17 歳で入党。1969 年、小隊長。同年、B52 の爆撃で負傷し、チャーヴィン省カウケーの病院に 7・8 ヶ月入院。その後、カマウにある第 9 軍区の軍報委員会に勤務。1973 年、北部へ勉強に。北部へはクアンビン (Quảng Bình) まで徒歩。クアンビンからは自動車。ハノイで 7 年生、ランソン (Lạng Sơn) で 8 年生の課程を修了する。ランソンで 75 年 4 月 30 日を迎える。76 年までハバック (Hà Bắc) で通信について学ぶ。1976 年末・77 年初、南部に戻り、330 師団 (1976 年成立) の通信小団に配属。准尉、副中隊長。1977 年半ば、カンボジアに (86 年まで)。師団の幹部委員会に勤務。1984 年、フィン・チョン・ファムが師団長に。1986 年、帰国し幹部委員会に。その後、カントーに駐屯する第 9 軍区通信中団 (第 29 中団) の党委書記と副政治員。1990 年、第 9 軍区参謀部副政治主任。1992 年、第 9 軍区博物館副館長。中佐。1999 年、ヴィンロン省軍事指揮部に。2001 年、大佐。翌年、退役。

## 2. 2人の元士官のインタビューから読み取れること

①ゲリラの人々より学歴が高い。二人とも入隊時までにはほぼ高校を修了しており、その後もさまざまな教育・訓練を受けているエリートである。特にホアは、南部では幹部の子弟向けの学校で教育を受け、さらに北部でも1973年から1976年まで長期間勉学している。

②革命的血筋がいい。南北の人的交流は54年以降も継続。ともに家族が解放勢力側。ホアの父親は第9軍区副参謀長まで務めた軍人で、革命的血筋がいい。1954年のジュネーブ協定後、ファムの兄弟、ホアの父親は北部に「集結」していて北との繋がりが強い。ホア父子のように、幹部や幹部候補生等が、1954年以降も南部から北部に教育・訓練のために多数送り出されていた。ホアによれば、彼の通っていたランソンにある国防省の文化学校には南部からの学生が多数在学していた。

③第9軍区に一貫して勤務。ファムの入隊時と第9軍区の成立はほぼ同時期であり、ファムの軍歴はほぼ第9軍区の歴史と重なる。ファムとホアはカンボジア駐屯の経験があるものの、ほぼ第9軍区内でキャリアが終始している。

④恩給の受給。ゲリラには恩給が支給されていない場合が殆どであるが、退役高級軍人の場合は異なる。ホアは現在、ひと月に恩給が360万ドン、退役軍人会副主席の給与が180万ドンで合計550万ドンの収入をえている。さらに石油会社勤務の奥さんの給与が200万ドンあり、比較的裕福な生活をおくっている。もっとも1981年に30歳で結婚した時は、昇進して上尉になったが、給与は多くなく、どこに行くにも徒歩で行き、自転車は持っていなかったという。

⑤この地方では南ベトナム解放民族戦線と臨時革命政府の役割は少なかった。以下はファムの発言の概要。部隊が戦闘する時、直接的には党が指導していた。南ベトナム民族解放戦線（1960年12月成立）と臨時革命政府（1969年6月成立）が直接戦闘に関わるのは多くなかった。しかし中央から社まで解放戦線の組織はあった。各級の解放戦線は兵士募集日などに解放戦線の旗をもち、解放戦線の指導部を紹介し、自らの存在を強調した。党の指導が表に出るのを避けるために、その時は解放戦線と臨時革命政府が南部の革命を指導したといていたが、実際は党の指導が主であった。解放戦線と臨時革命政府は今も自分たちは解放のため全ての勢力を結集し団結させるための戦線の性質をもってたとし、声望を高めようとしている。しかし内部的には武装勢力への影響力は限られていた。その時期は、第一に党の指導、第二に党の指導下の武装勢力、第三に後ろ盾となる人民運動（青年団、婦人会、農民会等）が影響力をもっていた。解放戦線は世界各国や諸団体向けの旗印の役割、対外工作用であった。しかし解放戦線の役割はパリ協定後、顕著になった。サイゴン政府との領域争いの時、画定の目印の旗として解放勢力側は金星紅旗ではなく解放戦線の旗を使用した。双方の旗挿しの応酬は両者を結果的に近づけることになり、サイゴン軍兵士の思想転換という大きな作用をもった。それが戦

争終結の一因にもなった。

⑥北の部隊を本格的に当地に迎え入れたのは 1971・72 年から。以下もファムの指摘である。南部革命の初期は現地の勢力によって担われ、その後、北の勢力が後ろ盾として増強されていた。南部の人々は北の部隊に期待するだけでなく、すすんで北の部隊を迎えた。1969・70 年からは北の部隊を受け入れ始めた。特殊部隊から始まり、1971・72 年には主力部隊の歩兵を受け入れるようになった。

⑦59～60 年とテト攻勢直後の 2 つの時期が最も困難な時期。ファムは当地の解放勢力にとって 2 つの時期が最も困難な時期だったと述べた。1 つは 1959～60 年の時期で、サイゴン政府による革命運動の弾圧が激しかった時期。サイゴン政府の弾圧に反発して、1960 年以降、革命運動が強まった。1962 年から革命勢力は急速に発展。人々の間に、どちら側についても敵に殺されるなら、闘争に参加するしか道はなく、生きる希望はないという雰囲気が高まった。2 つにテト攻勢直後で、敵の反撃・鎮圧が激しい暗黒時代で、犠牲者も多かった。ファムは、奥さんとは 11 年間交際していたが、離れていてなかなか結婚できず、1972 年に解放区が広がり、ようやく 30 歳で結婚できたと述べており、1972 年には解放勢力側は勢力を回復・伸張させていたと考えられる。

⑧ベトナム戦争の最大の勝因は共産党と全人民の総合的団結力。ホアはこう指摘し、また元南ベトナム副大統領グエン・カオ・キに対するベトナム政府の寛容政策を支持した。

#### IV. 北の正規軍兵士 A 氏への聞き取り

##### 1. 北の正規軍兵士 A 氏の入隊から復員までの軌跡

ハノイ出身で人民軍隊の正規兵としてメコン・デルタの戦場に参戦した経験をもつ A 氏 (1953 年生まれ。現在、ハノイ在住) からの聞き取り調査をもとに、彼の入隊から復員までの足取りを辿ってみる。A 氏の部隊はホーチミン・ルート、カンボジアを経由して、1972 年末頃にメコン・デルタに入っている。

時期	活動内容
1971 年 9 月	ハノイ市内の高校を卒業して直ぐに、ハノイから約 8 キロの村で入隊。1 週間滞在。
1972 年 3 月	その後、ホアビン省で 6 ヶ月訓練。 ホアビンからハノイに戻り、1 週間休暇。 1 週間後、ハノイから 10 キロの地点で集結し南下。ハノイから 25 キロのトゥオンティンの駅で列車に乗り、ヴィンまで乗車。そこからは自動車と徒歩。 クアンチからチュオンソン山脈に入る。
1972 年の 7 月か 8 月	解放区のロクニン (現在のタイニン省) へ到着。2・3 週間滞在。 そこからカンボジアに入る。2 ヶ月ほど滞在。 ベトナム国境付近でとまり、3 週間、水泳の訓練。 その後、ヴィンテー河を渡河し、ベトナム入り。雨季。ウーミンの森を行軍。第 1 中団に合流した時には、サイゴン軍の砲撃により人数は 3 分の 1 から 2 分の 1 になっていた。
1972 年末か 1973 年初	カントー省フンヒエップ県に。ここから本格的な戦闘始まる。 1 年ほど、ここに駐屯。その後、チャーヴィン省に。
1974 年末か 1975 年初	ヴィンロン省に入る。戦闘で負傷。南部解放時までヴィンロン。
1975 年 5 月 1 日	カントー市を接収。
1975 年 5 月 15 日	チャウドックでクメール・ルージュと戦闘。クメール・ルージュが占拠していたシャム湾の島々を攻撃。古傷のためカントー市で治療。 その後、部隊の方針で、部隊はハウザン省トットノット県で稲作に従事。
1977 年	北部に戻る。首都司令部が組織した試験に受かり、ハノイ総合大学入学。82 年に卒業。

## 2. A 氏のインタビューから読み取れること

①当時の北部社会の戦争動員圧力の強さ。旧北ベトナムでは家系存続のため男の子のうち一人は戦場への出征を免じていた。A 氏は男の子一人だったので入隊しなくてもよかったのであるが、1970 年代初頭の社会的雰囲気は誰も入隊するのが当然というものであった。そのため高校を卒業して直ぐに入隊した。A 氏の部隊では彼の学歴が一番高かった。多数は 7 年生卒だった。

②お腹をすかせた軍隊生活。新兵はひと月に 5 ドンの支給があり「5 ドン兵士 (lính 5 đồng)」と呼ばれた (当時でフォー 10 杯分)。その頃、兵士みんなはしょっちゅう空腹だった。トウモロコシやキャッサバの混ぜご飯を食べ、肉はめったになかった。国は兵士に現金、食糧 (米)、銃、衣服、労働用具を支給した。チュオンソン (Trường Sơn) 山脈での行軍は大変だった。各人が 20~25 キロの荷物を背負った。そのうち米が 10~15 キロをしめていた。小隊ごとに炊事した。朝、交替で朝食を用意し、昼飯用のおにぎりも作った。中国製缶詰の魚や肉も少しあった。

③南での商品の多さに驚く。ロクニン (Lộc Ninh) で、北にはない商品が豊富にあり、びっくりした。またカントー省に駐屯していた時、沢山の米があり、多くの商品を売っているのが印象的だった (とくにアイスクリームとビール)。

④安楽だったカンボジアでの行軍。カンボジアは爆撃がなく、昼の行軍だった。1972 年当時のカンボジアの人々は豊かで食糧の援助をしてくれた。長袖の服を交換して、食糧に換えた。一着でニワトリ 10 羽だった。カンボジアにいた時は軍隊で一番安楽だった時期。山登りもないし、食糧が十分にあった。カンボジアの人々は非常に友好的で部隊を助けてくれた。

⑤デルタの水に備えた戦闘準備。A 氏の部隊は 1972 年の末頃にメコン・デルタに入ったが、その前にカンボジア国境で 3 週間、水泳の訓練をしている。雨季のメコン・デルタでの行軍は難儀をきわめ、寝るところも水浸しで煮炊きもままならなかった。カントー省に駐屯した時、新しい衣服が支給され、乾きやすい材質のものに換えられた。(ゲリラだったドゥックによれば、当地にはマラリヤはないが、体を水に浸すことが頻繁なので水疱疹に悩まされる人が多かったという)

⑥北の正規軍と地元の地方軍・ゲリラはよい関係。両者は国の解放・民族の解放という目的を共有しており、よい関係を保っていた。地方勢力との交流では、食糧などを供給してもら一方、武器などの供与をせがまれた。武器、衣服などが十分になく、戦闘のほかに魚釣りなど食糧確保にも奔走した。解放戦線や臨時革命政府は対外イメージと抗米愛国勢力を吸収・結集するためであり、ここの戦場は遠かったため、影響は少ない。軍隊と武器と重要で大きな決定は北から来ていた。カントー、チャーヴィン、ヴィンロンの解放区は約 20% で、サイゴン政府

支配地区と入り組んでいた。A氏の所属部隊は元ゲリラのティンが「すべて北部の兵士からなる部隊」だと述べていた第1中団であった。

⑦旧サイゴン軍兵士の扱いに差別はない。サイゴン軍兵士に対しては戦後、3日から1週間の「学習」をさせた。生活のためにサイゴン軍兵士となった人が多かったので彼らが特に反革命的であったわけではない。彼らに対して戦後3～5年間は偏見もあったかもしれない。ただ差別は士官に対してのみで、普通の兵士についてはない。北と南の深刻な対立はない。人々は戦争に飽きている。みな戦争が好きではなく、再び同じように戦争をすることはできない。

おわりに

### 1. 第9軍区における武装闘争のイニシアティブ

福田忠弘氏は、1954年のジュネーブ協定から1961年5月にケネディ政権が新たな軍事要員の増員を決定した時期までの、南ベトナムにおける反政府運動の実態を研究し、南ベトナムの解放勢力によるイニシアティブの方が大きく、ベトナム労働党中央は二次的な役割を果たしたにすぎないとしている。そして1955年8月頃から南部の自律的な武装勢力の建設が始まっていたと指摘している<sup>15</sup>。筆者の今回の聞き取り調査では福田氏の研究対象時期のことについては、残念ながら、あまり聞き出すことができなかった。先に引用した『ベトナム軍事百科事典』の一節「ベトナム南部解放軍は、1956年末から再組織化された南部の武装自衛隊、武装宣伝隊の基礎の上に建設・発展」の「1956年末から再組織化された南部の武装自衛隊、武装宣伝隊」の部分には南部の自律的な動きがあったことが含意されているのだろうか。ファムも「南部革命の初期は現地勢力によって担われ」と述べている。ただ、南部の現地での動きと労働党中央との指導との間に齟齬がある場合、「北の指導」vs「南の主体性」という問題なのか、「中央の指導」vs「地方・現場のイニシアティブ」の問題なのかに留意しておく必要があるであろう。

1961年の「ベトナム南部解放軍」の成立は、反サイゴン政府運動のイニシアティブが南部の解放勢力から労働党中央に移っていったことを意味したのだろうか。上記事典では、「ベトナム南部解放軍」は労働党の指導の下、国防省・ベトナム人民軍総司令部の指揮の下に置かれ、直接的には南部中央局とその直属の軍事委員会の指揮下に置かれるとされている。ここには南ベトナム解放民族戦線は登場してこない。聞き取り調査においても、ティーは、南ベトナム解放民族戦線はここでの抗戦に影響を与えていないと述べており、ホアやA氏も同様の指摘をしている。第9軍区は「ベトナム南部解放軍」と同じ1961年に成立している。1963年には第1中

<sup>15</sup> 福田忠弘『ベトナム北緯17度線の断層 南北分断と南ベトナムにおける革命運動(1954～60)』成文堂、2006年、2ページおよび152ページ。



団が、1968年には第3中団が、1976年には第330師団が成立している。このように61年以降、正規の主力部隊の整備がすすんでおり、軍事的に南ベトナム解放民族戦線が果たす余地は少なかったように思われる。ただしファムも指摘しているように、政治宣伝工作上、南ベトナム解放民族戦線のもつ意義は大きかったと考えられる。

今回の聞き取り調査では、福田氏が指摘されるような「南の主体性」を強く感じさせるインタビューには出会わなかった。これは福田氏が研究対象とされている時期より後の時期がインタビューの中身の中心になったこと、たまたまインタビューが「北」や「中央」の指導を強調する人たちに偏っていたことによるかも知れない。また南ベトナム解放民族戦線の影響力も南部の地方によって異なっているだろう。今回の調査で印象に残ったことの一つは、南部の解放勢力の幹部・幹部候補生およびその子弟が1954年以降も予想以上に多く北部に行き、教育・訓練を受け、北緯17度線を越えた人事交流していることである。この層の人々、本稿でいうとファムやホアは、「南の主体性」を少なくともインタビューの中では強調しなかった。むしろこの点では、元ゲリラであったティンやティエンの方が南部人としての意識が露出し、南部ゲリラの自負心を表現しているように思われる。

## 2. 北部の正規部隊の本格的投入時期

小倉貞男氏は、「北ヴェトナムは、65年から正規軍を南下させはじめ、本格的な戦争状態に突入し」<sup>16</sup>、「68年に入って、大勢の北の正規軍が南に入った。南へ行くことは、もう秘密でも何でもなく、オープンとなった」<sup>17</sup>としている。テト攻勢後、南部における革命武装勢力の主力は北の正規軍に比重が移されるようになったことは定説化しているが、その具体的時期は地方によって若干のズレがあるであろう。メコン・デルタのヴィンロン、チャーヴィンに関しては、ティエンの証言では60年代なかばぐらいから入っていたが、それは限られた幹部だけのようである。部隊としての受け入れは、ファムによれば、1969・70年から始まり、主力部隊の歩兵部隊を受け入れるようになったのは71・72年からである。ティンも、当地では1972年から北の正規軍が登場するようになったと指摘し、ファムの証言とほぼ符合している。実際に北の部隊に属していたA氏が、メコン・デルタに入ったのは1972年末である。以上から、ヴィンロン、チャーヴィンについては、1971・72年頃から北の正規軍の本格的な投入が始まったといえる。

北の正規部隊と南の革命武装勢力との関係については、北の後ろ盾がなければ南を解放することはできず、南の人は北の部隊を好んでおり、両者はよい関係にあったとの証言が殆どであ

<sup>16</sup> 小倉、前掲書、140ページ。

<sup>17</sup> 小倉、前掲書、199ページ。

った。ただ元ゲリラのティンは、北の部隊は南の人の支え（戦闘においても生活においても）がなければ、何もできなかったと南の武装勢力の自負心を覗かせている。また、ティンは、両者が信頼しあっていないこともあり、その時には多くの誤りを犯したと率直に述べている。ゲリラは戦争中には無給で戦闘し、戦後は、ゲリラから軍隊に入隊して長い軍歴をもつ人以外、恩給を受給していない人が殆どである。北部の退役軍人でも恩給を受給していない人は多いが<sup>18</sup>、南部の元ゲリラと比べると南北格差がある。このような待遇の違いが「両者はよい関係にあった」との「戦争の記憶」を今後変えていくことがあるかも知れない。

### 3. 戦後の解放勢力側とサイゴン政府側の関係

戦後、サイゴン軍の兵士に対しては短期間の「学習」が、士官に対しては長期間の「学習」が課せられた。インタビューの多くの方は、サイゴン軍の一般兵士の多数はやむをえず徴兵されたのであって、解放勢力側に強く反対していたわけではなく、彼らに寛容な態度でのぞむべきだとしている。ティエンが印象的な発言をしている。「サイゴン軍兵士も同じベトナム人であり、当時の環境でやむをえなかった、彼らに恨みはない。ただ、反革命者を愛さないし、反革命者の戦死者は祀らない」と。インタビューの8人はいずれも戦後に両者の間に深刻な対立や差別はないとしている。しかしこれは「勝者」の言い分であって「敗者」からすればまた違った言い分があるであろう。サイゴン軍兵士や士官の戦死者はベトナム国内の公的な祭祀の対象とはなっていないし、サイゴン軍士官は公職から排除されるなど、「勝者」とは異なった戦後史を歩んできたはずだからである。

### 4. 南部解放勢力「退役軍人」の「戦争の記憶」

今回の聞き取り調査で聴取できた南部解放勢力「退役軍人」の「戦争の記憶」の語りを集約すると、「党の指導は南部でも貫徹していて、南ベトナム解放民族戦線の軍事的影響力は極小で、南部に投入された北の正規軍と南の武装勢力は良好な協力・相互依存関係にあったし、戦後は党・国家の寛容政策により旧サイゴン軍兵士も現体制に融和している」とまとめることができるであろう。このような記憶のあり方が支配的であることによって、旧サイゴン政府側だった人々の記憶は「暗渠化」され、等閑にされてきた。「南の主体性」や南ベトナム解放民族戦線の軍事的役割の再評価・強調は、上記の「戦争の記憶」に対し揺さぶりをかける対抗記憶となりうる。したがって歴史的事実はどうであったかは別として、「戦争の記憶」の抗争として、「南の主体性」や南ベトナム解放民族戦線の軍事的役割の再評価・強調が今後も持ち出されてくる

<sup>18</sup> 拙稿「現代ベトナムにおける『退役軍人』と『退役軍人会』—ベトナム北部ナムディン省ハイハウ県ハイソン社の事例—」『東京外国語大学論集』第73号、2007年、161～162ページ参照。

ことはあろうし、またそれへの再反論もなされるであろう。今回の聞き取り調査のインタビューもそのような記憶の抗争のダイナミズムから無関係ではない。ファムの発言などはそのことを十分に意識した上での発言である。

